

# 地下にねむる神戸の歴史展

発掘現場からの報告



神戸市立考古館

1980

第12回特別展

# 地下にねむる神戸の歴史展

発掘現場からの報告

神戸市立考古館

1980

## 目 次

開催にあたって	..... 1
垂水区の遺跡	
1. 吉田南遺跡	..... 2
2. 新方遺跡	..... 8
3. 北別府遺跡	..... 10
4. 高津橋・岡遺跡	..... 12
5. 天王山第4号墳	..... 14
6. 常本遺跡	..... 16
7. 黒田遺跡	..... 18
8. 西神ニュータウン建設予定地内の遺跡	..... 20
9. 神出古窯址群・茶山支群Ⅰ号窯	..... 27
10. 大歳山遺跡	..... 28
11. 舞子古墳群	..... 30
12. 狩口台きつね塚古墳	..... 34
13. 史跡 五色塚古墳・小壺古墳	..... 36
長田・兵庫・生田区の遺跡	
14. 神楽町遺跡	..... 38
15. 棚・荒田町遺跡	..... 40
灘・東灘区の遺跡	
16. 桜ヶ丘遺跡B地点	..... 42
17. 史跡 処女塚古墳	..... 44
18. 郡家大歳遺跡	..... 45
北区の遺跡	
19. 重要文化財 箱木家住宅(箱木千年家)	..... 46
20. 淡河城址	..... 48
21. 萩原遺跡	..... 49
22. 吉尾遺跡	..... 50
23. 北神ニュータウン建設予定地内の遺跡	..... 52
24. 自彌遺跡	..... 53
まとめ	..... 54

## 開催にあたって

神戸市内には、旧石器時代から江戸時代にいたるまでの遺跡が2000カ所以上あるといわれています。これらの遺跡は、私たちの祖先がどのように生きてきたかを記す足跡ともいべきものです。

近年の開発工事にどもない、神戸市では年間20件の緊急発掘調査をしています。その大部分の遺跡は破壊されているのが現状です。

今回、「地下にねむる神戸の歴史展」を開催したのは、神戸市がここ10年間に実施してきた発掘調査のうちから24遺跡の出土品を展示し、最近の調査成果を報告するとともに、私たちの目の前に姿をあらわした遺跡から郷土の歴史を理解していくただこうという主旨からです。この催しによって、市民の皆様の文化財に対する理解がさらに深まり、神戸の歴史を考えていただく一助となれば幸いです。

1980年10月1日

神戸市立考古館・神戸新聞社

よし だ んなみ  
吉 田 南 遺 跡 (昭和51年度～調査継続中)

所 在 地 神戸市垂水区玉津町枝吉  
時 代 弥生時代～鎌倉時代  
種 類 集落址、官衙跡

位置・経過 神戸市下水道局が建設する、環境センター予定地内で発見された吉田南遺跡は、明石川下流右岸の沖積地にひろがる、弥生時代から鎌倉時代までの複合遺跡です。

現在までに、発掘調査は第11次まで行われ、調査面積は24,000m<sup>2</sup>をこえています。

調査の結果、遺跡の南北には、かつて自然の河川や大溝が流れ、4カ所の微高地上に、集落が形成されていたことがわかりました。

弥生時代の遺構・遺物 弥生時代の集落は、東部微高地の東側に竪穴住居址3、西側に壇棺墓3が営まれ、中央に溝を掘って居住地と墓地を区画していました。竪穴住居址は、すべて円形でした。

遺物は、甕・壺・高环・鉢・タコ壺・手培形土器のほか、鐵斧やその柄、銅鏡などが発見されました。

弥 生 土 器  
(後期)



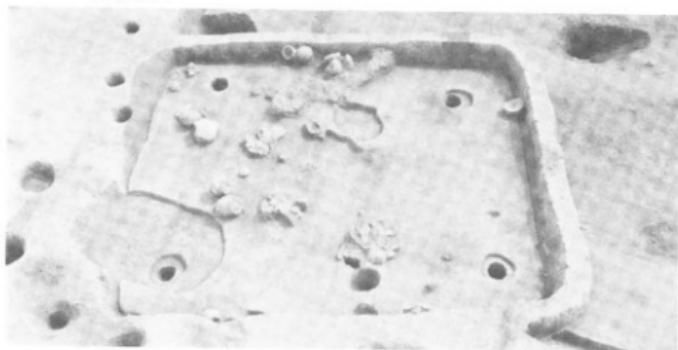
弥 生 土 器  
(後期)



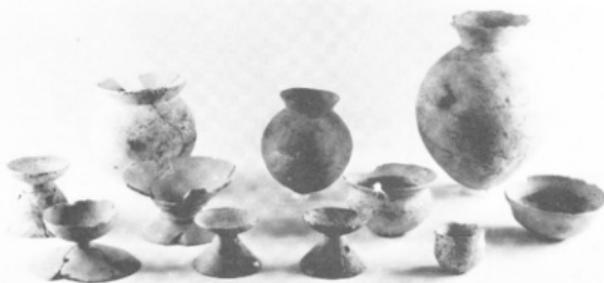
### 古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の集落は、方形竪穴住居址が、東部微高地に41、西部微高地に4、北部微高地に27、総計72軒が前期から後期にかけて営まれていました。前期・中期には東部微高地が、後期になると北部微高地が集落の中心になっています。このように吉田南遺跡では、弥生時代後期から古墳時代後期まで、竪穴住居が存続していました。

遺物は、土師器、須恵器、製塙土器、タコ壺、双孔円盤、紡錘車石鍤、土鍤、勾玉、管玉、ガラス玉、土玉、鉄製品などが出土しています。



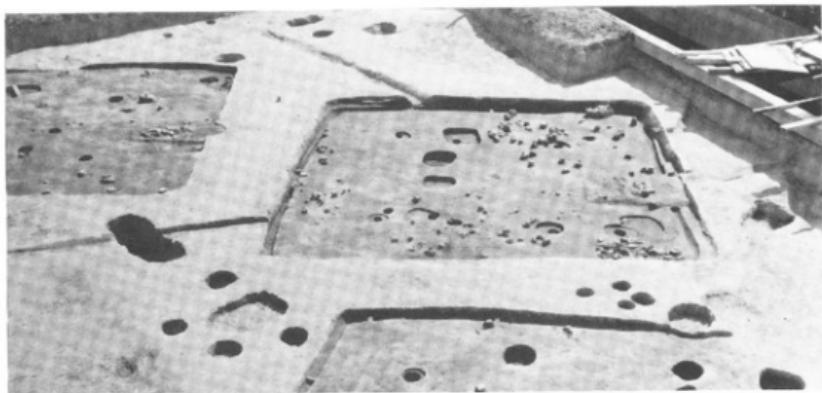
古墳時代住居址



土師器（4世紀）



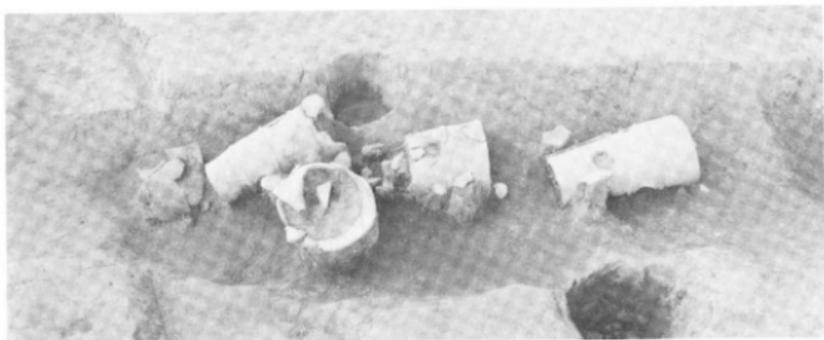
土師器（4世紀）



古墳時代住居址（5世紀）



古墳時代土師器・須恵器（5世紀）



埴輪出土状況（6世紀）

## 奈良時代後期～平安時代前期の遺構・遺物

奈良時代後期から平安時代前期の間には、掘立柱建物が35ありました。そのうち西部微高地の26の建物群は、南北方向に整然と配置され、計画的に造営されたものと思われます。

遺物は、土器のほか、木簡・墨書き器・陶硯・帶金具・瓦などが多数出土しています。なかでも「葛江里」と書かれた木簡が発見され、これらの建物群が、官衙的性格をもつ遺跡ではないかと推定されています。

東部微高地では、掘立柱建物跡8が発見されました。建物の方向は、西部微高地と異なり、一定ではありません。遺物は、土器類・石帶・瓦などがあります。

官衙推定地の北東部を流れる河川では、奈良時代の木橋(13m)が発見されました。当時の、橋を架ける技術を知る上で、貴重な資料です。河川からは、多量の須恵器・土師器・木製品が出土しています。なかでも特殊なものとしては、木製刀子・車輪などが発見されました。



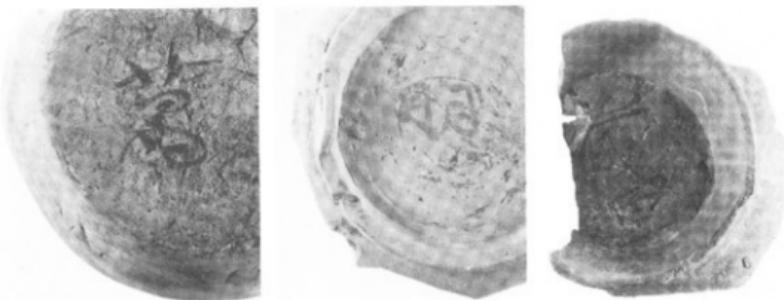
奈良時代掘立柱建物跡群



奈良時代軒丸瓦



奈良時代円面礎



奈良時代墨書き土器〈菴〉

〈朋〉

〈藏豆〉



奈良時代帶金具

#### 中世の遺構・遺物

中世鎌倉時代の集落は、小規模な建物跡13が見つかり、付近に井戸が掘られていきました。土師器・須恵器・瓦器などが出土しています。

#### まとめ

吉田南遺跡の周辺には、弥生時代前期の吉田遺跡・片山遺跡、後期の高田遺跡・持子遺跡、古墳時代前期の出合遺跡があります。

弥生時代から古墳時代にかけて、明石川下流域右岸の沖積微高地には、吉田遺跡群ともいべき大集落が営まれていたと思われます。吉田南遺跡は、その一部であると考えられ、今後、周辺地域の調査が必要と思われます。

吉田南遺跡の西部微高地で発見された掘立柱建物跡群は、先に述べたように官衙（役所）的性格をもつものと思われます。『播磨國風土記』には、明石郡に関する記載が欠けており、郡衙（郡役所）の位置についても不明でしたが、吉田南遺跡は、明石郡衙跡の有力な候補地と考えられます。

（吉田南遺跡については、現地説明会資料をとりまとめ掲載しました。写真についても吉田片山遺跡調査団の御協力を得ました。）

しん ぱう  
新 方 遺 跡 (昭和55年度)

所 在 地 神戸市垂水区玉津町高津橋  
時 代 弥生時代  
種 類 墓址

位 置 新方遺跡は、明石川の河口から約2km上流、標高8mの低地に立地しており、これまでに2度の発掘調査が行われ、弥生時代から鎌倉時代にいたる遺物が出土しています。今回、店舗建築工事に先だって行った調査では、弥生時代中期の墓址が多く見つかりました。

遺構・遺物 発見された墓址は、土塙墓・木棺墓、溝の斜面に貼石をめぐらした周溝墓です。この周溝の中からは、弥生時代中期の土器が多数出土しました。土器は、故意に破碎されたもの、器としての機能をもたない胴部に孔をあけたもの、祭祀用のミニチュア土器など葬送儀礼にともなうと思われるものが大部分でした。高さ90cmにもおよぶ壺も2点含まれており、その特殊性をうかがわせています。

ほかに、和泉・紀伊・河内地方から運ばれてきた土器や、紀伊地方で産出する結晶片岩製の石庖丁などがあります。当時の交流の広さを知ることができます。また、長さ20cm・幅6cmもある、他に例を見ないほど大きな石槍が出土しています。

まとめ この遺跡の西方1.2kmには、近畿地方最古の弥生時代の遺跡のひとつとして知られる吉田遺跡があります。明石川流域の弥生時代は、この吉田遺跡を足がかりに、あるいは上流へ、あるいは海岸沿いに東へ西へと展開していきます。その中で新方遺跡は、吉田遺跡からの最初の分村であり、弥生時代中期には、明石川流域の中心的な役割を担っていたと思われます。



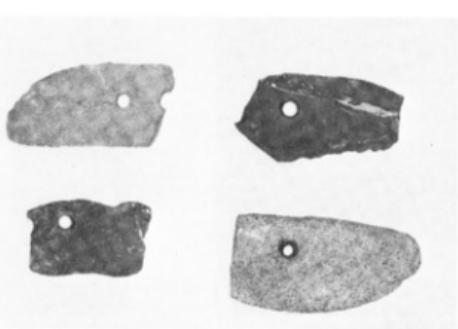
貼石のある  
周溝墓



上 周溝内より出土した土器（中央の壺 高90cm, 左端 河内産）

下右 大型石槍（現残長20cm）

下左 石庖丁



きたべふ  
北別府遺跡（昭和51～53年度）

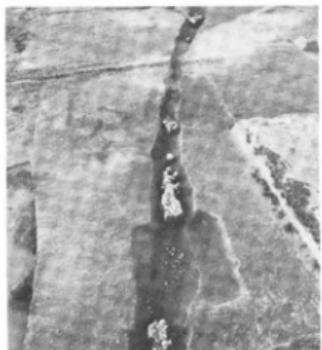
所 在 地 神戸市垂水区伊川谷町別府  
時 代 弥生時代～平安時代  
種 類 溝、掘立柱建物跡、火葬墓

位 置 土地区画整理事業に先立ち発掘調査を行った北別府遺跡は、明石川の支流、伊川の中流域の河道より一段高い低位段丘上に立地しています。この付近一帯は、別府という地名と、伊川谷總社が存在することから、明石郡衙推定地のひとつでした。しかし、発掘調査の結果、郡衙と考えられる遺構ではなく、ほかに有力な推定地（吉田南遺跡）も発見されたことで、一応否定されています。

遺構・遺物 昭和51年度に調査を行った4カ所のうち、2カ所で良好な遺構が見つかりました。その1カ所から幅40～60cm、深さ30～50cmの奈良時代終わり頃の溝が検出され、その中には土器群が2カ所ありました。土器群のひとつは、土師質の製塙土器の破片が多く、須恵器はほとんど含まれていませんでした。もうひとつの土器群は須恵器（壺・甕・壺）で占められていました。

もう1カ所の地点では、掘立柱建物跡1、火葬墓2が見つかりました。建物跡は1間×3間の大きさで、それに伴うと考えられる櫛（堀）跡も見つかりました。火葬墓には、平安時代の須恵器の塊を入れた土塊を方形の溝で囲むものと、同じく平安時代の土師器の塊の中に2つの壺を入れたものがありました。

まとめ 北別府遺跡は、3年間にわたる調査で、弥生時代中期後半に始まり、平安時代にまで継続する複合遺跡であることがわかりました。



奈良時代溝の全景



溝内遺物出土状況



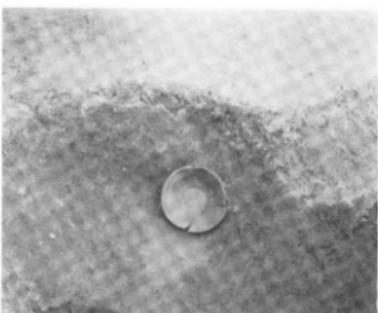
奈良時代溝出土遺物



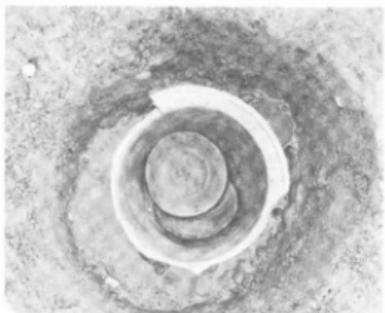
奈良時代製塙土器



掘立柱建物全景



火葬墓遺物出土状況



藏骨器出土状況



火葬墓出土遺物

こうづばし　おか  
**高津橋・岡遺跡**（昭和54・55年度）

所 在 地 神戸市垂水区玉津町高津橋  
時 代 弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代後期  
種 類 竪穴住居址・掘立柱建物跡

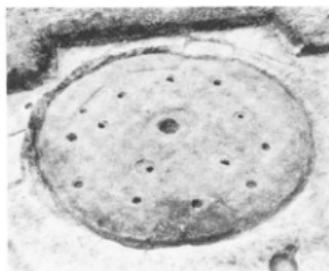
位 置 宅地造成工事に先立ち発掘調査を行った高津橋岡遺跡は、樋谷川が明石川と合流する地点の西側段丘上にあります。高津橋岡遺跡は弥生時代・古墳時代・鎌倉時代の集落遺跡で弥生時代後期の住居址1, 古墳時代後期の住居址8, 鎌倉時代の掘立柱建物跡4が発見されました。

遺 構 弥生時代の住居址は直径が8.8mもある円形の竪穴住居址で、西南側に入り口と思われる方形張り出し部がありました。床面の一部は一段高いベッド状になっており、甕・鉢などが出土しました。この住居址は火災によって壊れたらしく、壁や床が赤く焼けていました。

古墳時代の住居址は方形の竪穴住居址で西辺にカマドがつくられており、付近には砥石や須恵器が置かれていました。

鎌倉時代の掘立柱建物跡の柱穴からは日常使われた碗などが出土しています。

まとめ 今回の調査面積は、わずかで遺跡の広がりについてよくわかりませんでした。しかし、周辺には遺物が散在しており、岡遺跡の北方にある玉津中学校内からは弥生時代後期の壺棺が出土しています。このことから、この台地一帯が遺跡であると思われます。明石川の沖積地にある吉田南遺跡や新方遺跡といった大遺跡と同じように、高津橋岡遺跡も大遺跡となるかもしれません。



竪穴住居址（弥生時代）



弥生土器（後期）



古墳時代後期住居址



須恵器（古墳時代）



振立柱建物跡（平安時代）



須恵器（平安時代）

てんのうさん

## 天王山第4号墳（昭和54年度）

所 在 地 神戸市垂水区伊川谷町別府  
時 代 古墳時代前期  
種 類 古墳

位 置 天王山古墳群は、伊川の西岸、明石平野を望む丘陵上に位置しています。

墳 丘 天王山第4号墳は、長辺（南北）約19m、短辺約16mの長方形の古墳で、高さは現高約2.7m、推定高約3.3mで、墳丘のうち下方約1mは地山を削り出して整形し、それより上は盛土を行っています。

埋葬主体部 墳頂の平坦面は南北約8m、東西約5mで、その中央に長辺約7m、短辺約3mの南北に長い隅円方形の土塙を掘り、2つの割竹形木棺を納めていました。

第1号棺 東側の第1号棺は長さ約4.5m、南端幅約0.6m、北端幅約0.5mで、棺の中央に管玉2、ガラス玉5の一群があり、棺の南端近くに鉄刀1、<sup>イリハシル</sup>鉈1、鐵製鍔先1があり、北端近くに鉄斧1、鐵鎌1が副葬されていました。

第2号棺 西側の第2号棺は長さ約5.4m、南端幅約0.4m、北端幅約0.5mで、棺の中央に歯が1体分あり、その東側に銅鏡1、歯の周辺に管玉5、ガラス玉16が見つかり、棺の北端近くに鉈2、鐵製鍔先1が副葬されていました。

棺の幅が広い方に頭部を置いて埋葬されていたとすれば、第1号棺と第2号棺は、頭をそれぞれ逆方向にむけられていたことになります。

遺 物 第2号棺から発見された鏡は、「八禽鏡」と呼ばれる、径約9.6cmの小形鏡で、中国製である可能性が高いものです。

墳頂面の南北隅部には、口を欠いた壺に大形の鉢をかぶせた土器棺が埋められており、墳丘斜面には、径約0.9mの土塙のなかに据えられた手焙形土器がありました。古墳出土の手焙形土器は、珍しい例です。

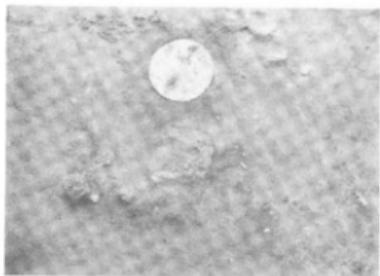
まとめ この古墳は、これまで明石川流域で知られている古墳のうち、最も古い時期に属するもので、4世紀前半に築造されたものと推定しています。



天王山第4号墳全景



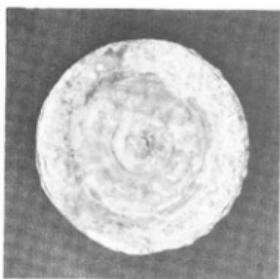
主体部全景



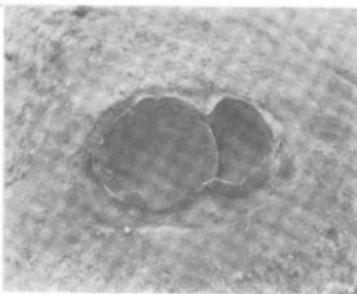
第2号棺 鏡・玉頸出土状況



第1号棺  
鐵器出土状況



八 爪 鏡



墳頂部出土土器棺

常 本 遺 跡 (昭和53年度)

所 在 地 神戸市垂水区平野町常本  
時 代 弥生時代～古墳時代  
種 類 集落

位 置 園場整備事業に先立ち発掘調査を行った常本遺跡は明石川中流域の右岸の河岸段丘上に営まれた弥生時代と古墳時代の複合集落遺跡です。

概 要 調査の結果、弥生時代前期の住居址2・木棺墓4・木蓋土塙墓(土塙に遺体を葬ったのち木の蓋をした墓)2、弥生時代後期の溝、古墳時代後期の住居址14が発見されました。

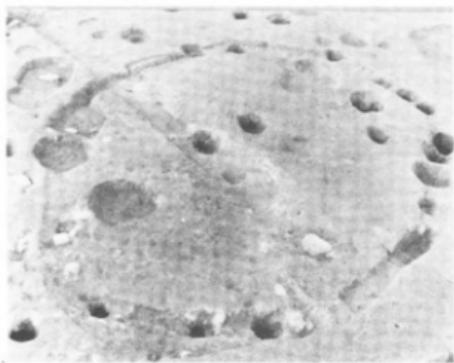
弥生時代の遺構・遺物 弥生時代前期の住居址は隅円方形と円形の竪穴住居址でした。また木棺墓の1つには木棺の上に胴部下半を打ち欠いた壺が供えられました。

古墳時代の遺構・遺物 古墳時代の方形の住居址には西辺にカマドがつくられ、カマドの中央には鍋、甕を支える石柱がたてられていました。遺物は5世紀後半～6世紀後半の蓋環・高环などの須恵器が住居址の床面から出土しています。

まとめ 明石川流域の稻作文化は吉田遺跡から始まり、次の段階で新方遺跡、居住遺跡へと波及したと考えられてきました。しかし、今回常本遺跡で弥生時代前期の集落が発見されたことによって、明石川中流域にも早々と米作りが伝播していたことがわかりました。また、弥生時代前期の住居址の発見は、近畿地方ではあまり例がなく、常本遺跡での発見は、弥生時代前期の生活文化を考える上で貴重な資料といえます。



常本遺跡全景



弥生時代住居址



壺形土器  
(弥生時代前期)



古墳時代住居址  
(6世紀)



須恵器 (6世紀  
左下は5世紀)

## くろ だ 黒 田 遺 跡 (昭和54・55年度)

所 在 地 神戸市垂水区平野町黒田  
時 代 弥生時代中期、古墳時代後期、平安時代  
種 類 積穴住居址、掘立柱建物跡、土塙、溝

位 置 黒田遺跡は、明石川中流域の西岸に位置し、標高約60mの北から南に延びる段丘上にあります。

経 過 昭和53年から圃場整備事業が行われることになり、事前に試掘調査を行ったところ、弥生時代、古墳時代および平安時代の遺物や遺構がみつかりました。そのため、工事によって削平される部分の発掘調査を行いました。

遺 構 発掘調査の結果、弥生時代中期後半の土塙1、ピット数カ所、古墳時代後期の積穴住居址2、土塙、溝など、平安時代の掘立柱建物跡3以上、土塙、溝、ピット多数が検出されました。

遺 物 これらの遺構に伴う遺物は多量に出土しました。弥生時代のものでは、中期後半の壺、甕などの土器類や、石鐵などがあります。古墳時代後期の須恵器、土師器のほか、土塙より須恵器壺とともに鉄滓、フイゴ羽口が出土しました。平安時代の遺構のなかに、土器窪状の径約1mの円形土塙が3カ所あり、ここから須恵器、土師器の壺、甕が多く出土しました。

まとめ 調査は、限られた範囲の調査であったため遺跡全体を明らかにすることはできませんでしたが、黒田遺跡が古墳時代後期、平安時代後期の集落址であることが確認されました。さらに、平安時代の須恵器の塊埴類は、黒田遺跡の北方にある神出古窯址群で焼かれたものと思われ、当時の生産と流通を考えるうえで重要な遺跡です。



古墳時代積穴住居址

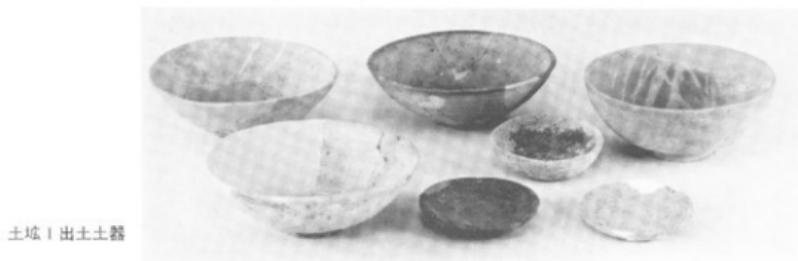
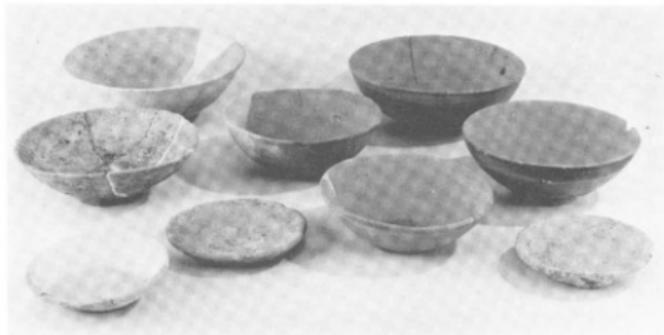


掘立柱建物跡と溝状遺構



土塙 3 土器出土状況

土塙 3 出土  
須恵器・土師器



土塙 1 出土土器



古墳時代  
須恵器・土師器

せいしん  
**西神ニュータウン建設予定地内の遺跡**（昭和45～55年度）

所 在 地 神戸市垂水区平野町・押部谷町・櫛谷町  
時 代 弥生時代～鎌倉時代  
種 類 集落址・墓址・古墳・窯址

位置・経過 西神ニュータウンは、垂水区平野町・押部谷町・櫛谷町にまたがる、約900 haの丘陵に建設中です。このニュータウン内には、弥生時代から鎌倉時代までの遺跡が100カ所以上あり、昭和45年から現在にいたるまで発掘調査を続けています。

〈弥生時代の遺跡〉

西神ニュータウン予定地内の弥生時代の遺跡は、明石川中流域を望む、標高70～100 mの丘陵上に点在する中期の遺跡群で、これまでに集落址・墓址が確認されています。

集落址は高地性集落と呼ばれるもので、水田面との比高差が数10 mあり、丘陵の尾根や斜面に築かれています。墓址には、単独で出土する壺棺や、群集する木棺墓・土塙墓、丘陵を方形に削り出した台状墓などがあります。基本的には、集落と墓址は別の尾根を利用しています。

養田中の池遺跡

養田中の池遺跡は、標高約90 mの平坦な丘陵上に存在する集落址で、竪穴住居址14が見つかりました。そのうちの1軒は、床面に多くの石屑が散乱し、ここで石器製作が行われたものと考えられます。

竪穴住居址のほか、多数の柱穴も見つかっているので、高床式の建物も、同時期にあったようです。

出土遺物は、弥生土器のほかに、石錐・石斧など多くの石器と、祭祀用の磨製石剣があります。



弥生時代竪穴住居址

### 第50号遺跡

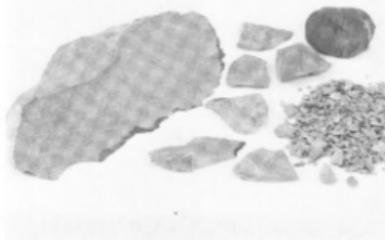
第50号遺跡は、養田中の池遺跡の南西約2.5kmの丘陵上に位置する、大規模な集落址です。尾根上や斜面に竪穴住居址40が見つかり、未調査地にも、数多くの住居址が埋もれていると思われます。

尾根筋にある住居址は平面円形で、平地のものと同じ構造です。斜面にあるものは、斜面の高い方を0.5~1.5m切り込み、低い方に盛土して、平面長方形の床面を形づくりています。柱は周壁に平行して、数本が一直線に並んでいます。

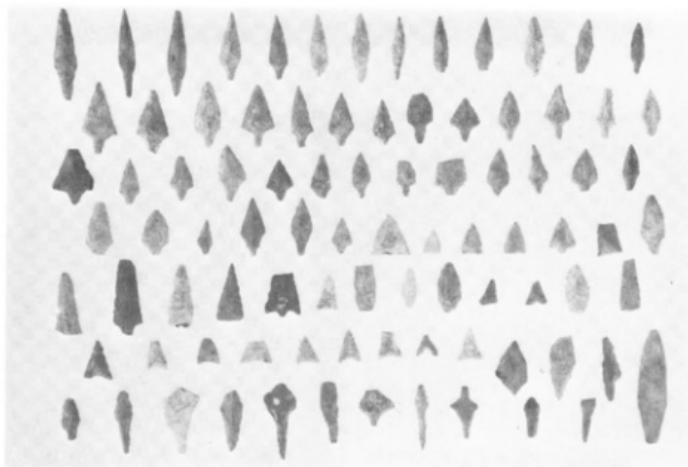
遺物は、この時期の特徴である大型の石鏃が多く、そのほかに石斧・石鎌などがあります。また、石器をつくるサヌカイトの原材(10cm~45cm)や、多量の石屑が散乱する住居址もありました。



第50号遺跡 斜面の住居址群



サヌカイト原材とフレイク



石 鏃・石 鑿

第48・65号遺跡

養田中の池遺跡・第50号遺跡は住居址が数多く集まり、集落を形成していますが、第48・65号遺跡は、見晴らしのよい尾根上に1～2軒の住居址があるので、おそらく高地性集落にともなう見張り台、あるいは狼煙台のような遺跡であったのでしょう。

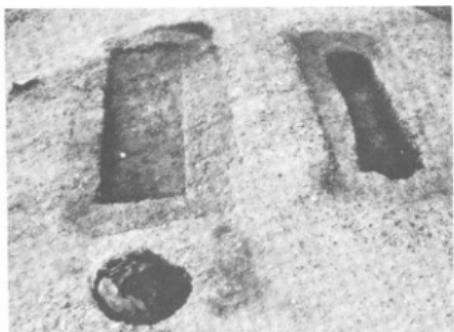
第40号遺跡

第40号遺跡は、養田中の池遺跡と第50号遺跡の中間にある丘陵上に築かれた、2基の方形台状墓で、近畿地方では類例の少ないものです。

2基とも、3つの埋葬施設があり、それぞれ木棺墓2と、小児用と思われる小さな土塙墓と覆棺墓からなっていました。



第40号遺跡全景



第40-2号墳墓主体全景



第40-2号墳墓出土の塞棺

#### 第47号遺跡

第50号遺跡から 250 m 北方の丘陵尾根につくられた墓址で、土塚墓 8・木棺墓 3 が見つかっています。これらは 2 群に分けることができ、整然と並んでいました。遺物はほとんどなく、わずかに弥生土器片数点が出土したのみです。



#### まとめ

西神ニュータウン内の弥生時代中期の遺跡は、瀬戸内海沿岸に普遍的に見られる高地性集落址で、その立地と、出土する石器が発達していることから、その時期に戦乱があったのではないかと考えられています。これらの集落址からは、石庖丁が 1 点しか出土していないので、ここで農耕を行っていたとは考えられず、平野部の集落と一体になっていたようです。後期になると、住居をすべて平野部に移しており、戦乱が終ったことがわかります。

墓址には各種の形態があり、埋葬された人々の間に身分差が生じていたと考えられます。

#### 〈古墳時代の遺跡〉

ニュータウン建設予定地内の、明石川・櫛谷川の平野部を望む尾根上には、30余りの小規模な古墳が点々と築かれています。

そのうち今までに 20 基の古墳を発掘調査しましたが、古いものは 4 世紀代に造られ、新しいものは 6 世紀中ごろに造られたものであることがわかりました。

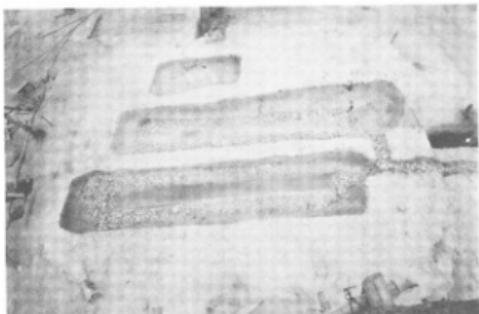
#### 堅田神社 1 号墳

堅田神社 1 号墳は、平野町堅田の集落の裏山に築かれたやや長方形の墳丘をもつた古墳です。内部主体は木棺直葬で、古墳の長辺に平行に 3 つ並んでいました。西側 2 つが割竹形の木棺で、もう 1 つは箱形の木棺でした。割竹形の木棺はいずれも 4 m を越えるもので、木棺の周囲には、櫻をつめた排水施設がありました。

副葬品としては、西端の木棺には、鏡・鉄剣・管玉があり、中央の木棺には鉄剣がありました。墳丘の麓部分から古墳時代はじめご

ろの土器が出土していることや、木棺が長大であることなどから、この古墳は4世紀ごろのものであると考えられます。

1号墳のほかにも4世紀代の古墳と思われるものは、他に第44・45号墳などの方墳をあげることができます。いずれも割竹形木棺をおさめていましたが、第44号墳は底に孔をうがった土器が、木棺の直上に置かれていました。



堅田神社1号墳主体部

#### 第30号墳

第30号墳は、ニュータウン建設予定地内の古墳のなかでは、平野部から離れた奥の尾根にあります。山道によって半分割られていました。内部主体は割竹形木棺で、その周囲に縄を敷き、その上に鉄劍や鉄鎌が置かれていました。

この古墳のように副葬品として鉄製品しかもたない古墳は、第9号墳があります。これらの古墳は、5世紀ごろのものと考えられます。

#### 堅田神社第3号墳 松本4地点古墳

堅田神社第3号墳は、堅田神社の境内の平坦な所に築かれた直径15mあまりの円墳です。墳丘の半分以上が土取りで破壊されていましたが、墳丘の西寄りの部分に箱形の木棺がおさめられていました。

木棺のなかには、鉄刀・刀子・鎌・須恵器が副葬されており、棺の外側に須恵器がおかれていました。

この古墳は出土した須恵器から、6世紀前半に築かれたものと考えられます。松本4地点古墳は、櫛谷川の平野部に近い丘陵の斜面に築れた、直径10m足らずの円墳です。墳丘の盛土は、ほとんど流失していましたが、墳丘の裾部と考えられるところに点々と須恵器が置かれていました。内部主体は、割竹形の木棺で土師器や鉄鎌が副葬されていました。

この古墳のすぐ近くには、小さな円筒埴輪を使った小児用と思われる埴輪棺がありました。

出土した遺物（須恵器）から、この古墳および埴輪棺は、6世紀中ごろのものと考えられます。

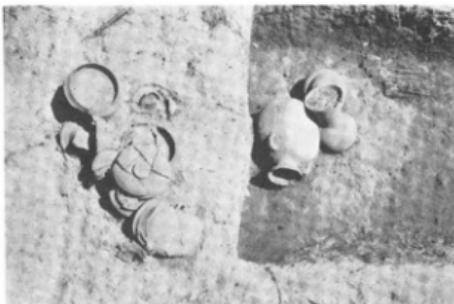
西神ニュータウン建設予定地内にある古墳の大部分は、堅田神社第3号墳や松本4地点古墳のような、6世紀前半から中ごろまでに築かれた古墳で、第33号古墳群のように、1つの尾根に6世紀のはじめから中ごろにかけて5つの古墳が次々と築かれていた古墳群もみつかっています。

右 堅田神社第3号墳主体部



下右 棺内外遺物出土状況

下左 須恵器（棺内出土）



古墳時代以降  
第48・50号遺跡

第48・50号遺跡は、弥生時代中期の遺跡ですが、奈良時代の火葬墓が、それぞれ1つずつみつかっています。火葬墓は、第40号遺跡でも鎌倉時代ごろのものが発見されました。

第88号遺跡  
(繁田1号窯)

第88号遺跡は、ニュータウン建設予定地内唯一の窯址で、ニュータウンより西方の神出古窯址群（平安時代～鎌倉時代）の1つの支群に属するものと思われます。

窯は平野部に近い、北に開口する狭い谷の東側斜面を掘りこんでつくられていました。水田を作る際に、なかほどの一部が破壊されしていましたが、他の部分は比較的よくのこっていて、窯内や灰原からは多量に遺物が出土しました。

この窯で焼かれたものは、須恵器の塊、片口鉢、小皿等で神出古窯址群で焼かれているものとしては普通のものですが、かわったもののとしては、長方形の規が出土しています。

みつかった窯址は1基だけでしたが、通常、数基が群在することが多く未調査の部分にまだいくつかの窯址が存在しているかもしれません。

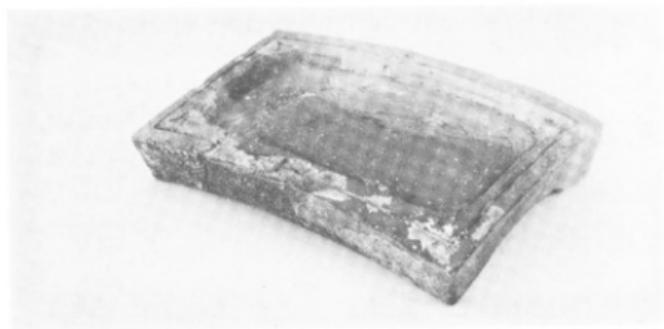
第48・50号  
遺跡出土  
藏骨器



第88号遺跡  
須恵器塊・皿



第88号遺跡  
長方規



かん で  
神出古窯址群・茶山支群 1号窯 (昭和51年度)

所 在 地 神戸市垂水区神出町東  
時 代 平安時代  
種 類 窯址

位 置 神出町一帯は、洪積世に形成された、ほぼ平坦な段丘ですが、その中に、古生層から成る雄岡・雌岡の2つの山が存在しています。雌岡山の南側斜面や、段丘が浸食されてできた谷の斜面に、平安時代から鎌倉時代にかけての、須恵器や瓦を焼いた窯址が多数あります。これらの窯址群を神出古窯址群と呼んでいます。茶山支群は、そのうちのひとつで、雌岡山から南西に延びる尾根の南斜面にあります。

遺 構 茶山一号窯は、宅地造成に伴い、発掘調査を行いましたが、水路、道路によって、その大部分がすでに破壊されており、残っていたのは、窯の煙道部の一部と思われる部分だけでした。このなかからは、瓦・鉢・塊・小皿等が、人為的に投げこまれたような状態で出土しています。なかでも瓦は、同じ型で作られた軒平瓦が3枚も出土しました。この軒平瓦は、京都の石清水八幡宮で出土している瓦と同じものであることがわかっています。

まとめ 神出古窯址群は、現在30数基の窯址が知られていますが、これらの窯址で焼かれた瓦・鉢・塊などが、兵庫県下だけでなく遠く京都まで運ばれて使われていたことが、近年の調査でわかつきました。茶山一号窯出土の瓦もこのことを裏付ける重要な資料です。

右 遺物出土状況  
下左 軒平瓦  
下右 須恵器塊・小皿



おお とし やま  
**大歳山遺跡**（昭和48年度）

所 在 地 神戸市垂水区西舞子  
時 代 繩文時代後期、弥生時代前・後期、古墳時代中・後期  
種 類 住居址、古墳

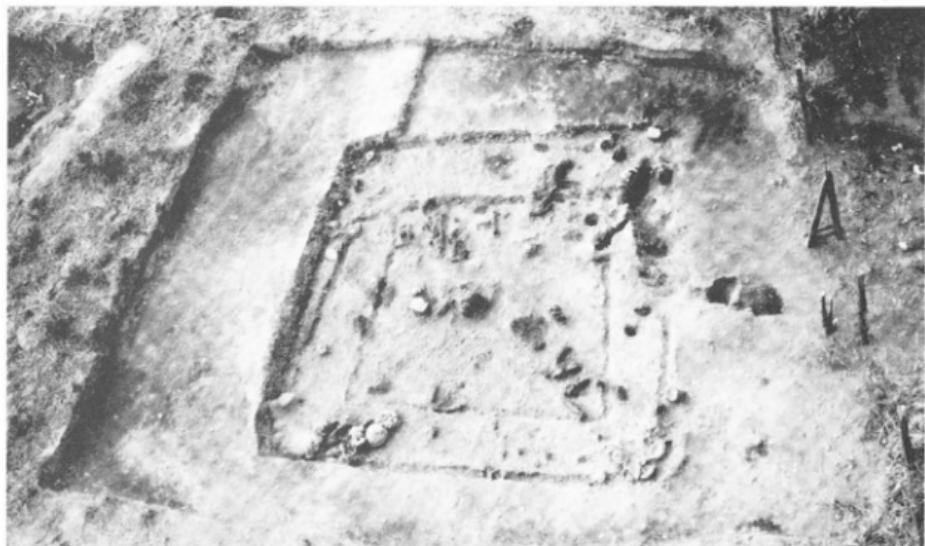
**位置・経過** 大歳山遺跡は、舞子丘陵の西端にあります。この遺跡は戦前から近畿地方の代表的な縄文時代の遺跡として知られていましたが、宅地造成で破壊されることになったため、遺跡の確認調査を行いました。調査の結果、弥生時代後期の住居址、古墳時代後期の前方後円墳が確認されました。このうち住居址数棟、前方後円墳1を含む地区を神戸市が買い上げ、遺跡の保存をはかりました。この保存区域を昭和48年に一部発掘し、その結果をもとに史跡公園として整備しました。

**遺構・遺物** 発掘調査では、弥生時代後期の方形住居址を1軒確認しました。この住居址は火災を受けて放棄されたと考えられ、住居址内の四隅や床面には、当時使われていた状態そのままで、总数40個にもおよぶ土器が出土しました。土器は、鉢・高環・壺・甕・器台・ミニチュア土器などですが、とくに鉢・高環が多数出土しました。この住居址の資料をもとに家屋復元をしています。

**まとめ** 大歳山遺跡は、縄文時代から古墳時代にいたる複合遺跡で、狭い範囲に重複しているために、多くの遺構が早くから壊されていましたが、もとは、この丘陵の縁辺に点々と家が並ぶ集落であったと思われます。



大歳山遺跡公園



住居址全景



出土遗物（弥生土器）

まい こ  
**舞子古墳群**（昭和52年度・55年度）

所 在 地 神戸市垂水区舞子坂  
時 代 古墳時代後期  
種 類 古墳

**舞子古墳群**　神戸市垂水区の舞子丘陵上には、数多くの古墳が存在しています。古墳は、丘陵の尾根上に点々と存在し、その多くは横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の円墳と思われます。この古墳群を総称して舞子古墳群とよんでいます。

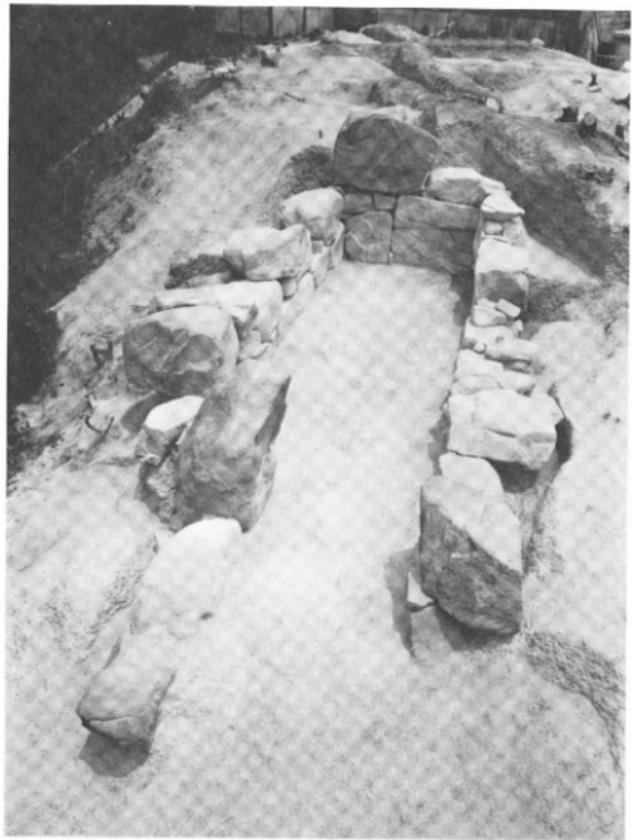
**支群**　舞子古墳群は、いくつかの支群（グループ）にわかっています。西から大歳山支群、西市ヶ坂支群、東市ヶ坂支群、西石ヶ谷支群、毘沙門塚支群、東石ヶ谷支群、山田台支群、尼ヶ谷支群、舞子台支群、星陵台支群の10支群です。そのうち、東市ヶ坂支群の1号墳、2号墳、西石ヶ谷支群の1号墳、2号墳は、近年宅地造成に伴い発掘調査を行いました。

**東市ヶ坂1号墳**　東市ヶ坂1号墳は、直径15mの円墳で、南に開口する横穴式石室を内部主体としています。古墳の裾には、堀がめぐっていました。石室は全長7m、幅1.2mで、石室内からは、須恵器の高环、环、环蓋、土師器塊、藏骨器などが出土しています。これらの出土遺物から六世紀の終わりごろにつくられたと考えられます。また藏骨器は、鎌倉時代から室町時代のもので、この時代に石室を再利用していることがわかります。

**東市ヶ坂2号墳**　2号墳は直径15~20mの円墳で、主体部は南に開口する片袖式の横穴式石室です。石室の大きさは、玄室の長さ5.5m、玄室の幅1.8m、羨道の長さ2.5m、羨道の幅1.2mです。石室内からは、金環9、ガラス小玉3、鉄刀2、釘4、須恵器の环、平瓶、土師器の増などが出土しています。金環の数から、石室内には少なくとも4人以上の死者が葬られていたと思われます。2号墳の築造時期は六世紀後半です。



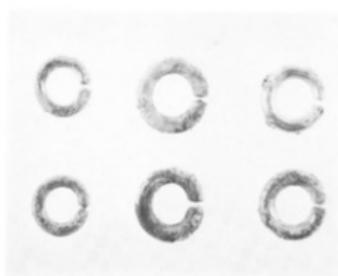
舞子古墳群全景



右  
東市ヶ坂2号墳

下左  
2号墳出土須恵器

下右  
2号墳出土金環



### 西石ヶ谷1号墳

西石ヶ谷1号墳は、直径18m、高さ3mの円墳で、北側に堀をもっています。主体部は、片袖式の横穴式石室です。玄室の長さ5m、幅1.8m、羨道の長さ3.5m、幅1.5mで、羨道内には閉塞石が置かれ、その下に排水溝が掘られていました。

1号墳の石室内や羨道前庭部からは多数の遺物が出土しています。須恵器は、壺蓋、壺身、高環、提瓶、平瓶、竈、台付有蓋長頸壺、直口壺、短頸壺などあわせて49点、土師器は、高環、塊が各1点出土しています。その他に金環3、ガラス玉37出土し、鉄製品は、釘、カスガイ、鉄鎌、刀子など多数出土しています。1号墳には2人以上の死者が葬られていたと考えられます。1号墳の築造時期は、六世紀後半と考えられます。

### 西石ヶ谷2号墳

2号墳も石室内や羨道前庭部から遺物が出土しています。須恵器は、壺身、壺蓋、高環、提瓶、平瓶、竈、台付長頸壺、有蓋短頸壺、甕などあわせて26点、土師器は鉢が1点出土しています。その他に金環2、ガラス玉39出土しています。鉄製品は、釘、鉄鎌、刀子などあわせて42点出土しています。

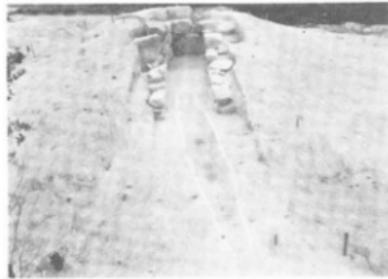
2号墳の築造時期は六世紀終わりごろと思われます。



西石ヶ谷1、2号墳全景



西石ヶ谷1号墳石室全景



西石ヶ谷1号墳石室排水溝



西石ヶ谷1号墳遺物出土状況



西石ヶ谷 1号墳出土須恵器



西石ヶ谷 2号墳埴物出土状況



西石ヶ谷 2号墳出土須恵器



西石ヶ谷 1号墳出土金環・ガラス玉



西石ヶ谷 2号墳出土金環・ガラス玉

かりくちだい  
**狩口台きつね塚古墳**（昭和54年度調査）

所 在 地 神戸市垂水区狩口台7丁目  
時 代 古墳時代後期  
種 類 古墳

位 置 狩口台きつね塚古墳は、国鉄朝霧駅の東方700mのところにあり、狩口台市営住宅の東端に位置しています。古墳からは、淡路島はもとより、家島群島、小豆島、さらには四国までも望むことができ、景勝の地に築かれています。

規 模 きつね塚古墳は、直径25m、高さが4mの二段築成の円墳で、古墳の外側に二重の堀がめぐっています。内側の堀は、古墳の裾をめぐっており、幅5m、深さ0.3mの規模で、外側の堀は、内側の堀から外方5mのところにあり、幅3m、深さ0.3mです。外側の堀まで含めると古墳の大きさは、直径50mにもなります。

内部主体 きつね塚古墳の石室は、西北西に開口する横穴式石室です。石室の大きさは、玄室幅2.2m、玄門幅1.4m、玄室残存高1.5m、羨道幅1.4m、羨道の長さ4m、羨道残存高は1.4mです。

出土遺物 きつね塚古墳の墳丘上からは、大甕が出土しています。また、玄室内からは、須恵器の甕、瓶、壺、蓋、長頸壺、高环片などが出土しています。

築造時期 きつね塚古墳の築造年代は、出土している土器から六世紀の中頃と考えられます。

神戸市内で二重堀のある古墳は他に例がなく、しかも後期古墳で二重堀をもつ古墳は珍しいといえます。



きつね塚古墳全景



石室 墓門



石室 側壁



石室 側壁



須恵器 瓢・环・壺・碟



須恵器塚出土状況

ごしきづか こつぼ  
**史跡五色塚古墳・小壺古墳** (昭和40~49年度)

所 在 地 神戸市垂水区五色山  
時 代 古墳時代前期  
種 類 古墳

位 置 五色塚古墳は、垂水丘陵南麓の台地上にあります。前方部を明石海峡に向かた前方後円墳で、全長194m、兵庫県下で一番大きな古墳です。五色塚古墳の西側には小壺古墳があり、ともに大正10年に国の史跡に指定されました。

両古墳の整備事業は昭和40年から、文化庁と神戸市が10年の歳月と2億5千万円をかけて完成しました。

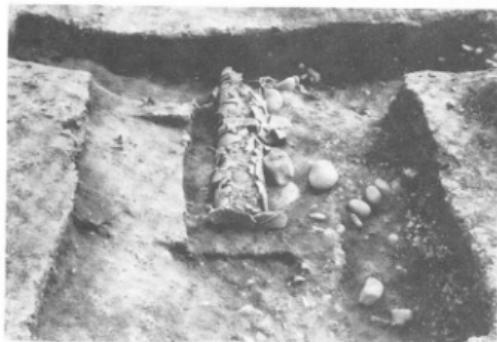
遺 構 発掘調査は、整備事業を行うために必要な資料を得る目的で実施されました。調査の結果、墳丘は3段の斜面から成り、下段は地山を前方後円形に残して周囲を掘り、中段・上段は盛土をしています。下段の斜面は小さな石、中段・上段は大きな石で葺かれており、その総数は223万個、総重量2750tと推定されています。

遺 物 墓頂と2段のテラスには、総数2200と推定される縁付円筒埴輪、朝顔形埴輪などがめぐらされ、また、蓋形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪も、少量発見されました。堀のなかには、いくつかの方形マウンドがあり、そのうちの東北マウンドには、円筒棺が埋められています。

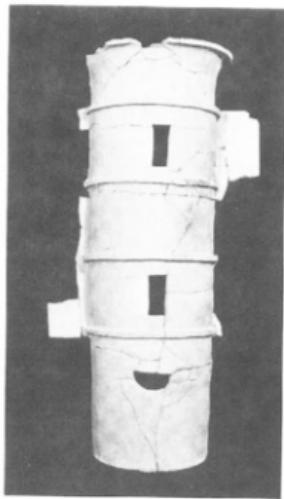
小壺古墳 小壺古墳は直径67m・高さ9mの円墳で、墳丘は2段に造られていました。頂上とテラスには埴輪をめぐらしていましたが、斜面には、石は葺かれていませんでした。



空からみた五色塚古墳



埴輪円筒棺出土状況



埴輪円筒棺



上 子持勾玉  
左 墓軸列と葺石

かぐら  
神楽町遺跡（昭和54年度）

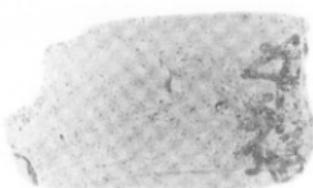
所 在 地 神戸市長田区神楽町1～2丁目  
時 代 弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代中期  
種 類 溝、土塙、ピット

位 置 神楽町遺跡は、国鉄の新長田駅の東約500mにあり、標高約4m（遺構面）の緩斜状地性低地に位置しています。神楽町遺跡周辺は、はやくから市街化され、遺跡の存在については最近まで全くわからませんでしたが、神戸市高速鉄道（地下鉄）新長田一布引間の延長工事に先立って調査を実施したところ、長田区神楽町1～2丁目で古墳時代から平安時代の遺物包含層を確認しました。そのため、再び発掘調査を行った結果、遺構・遺物が発見され、市街化されたところでも遺跡の残っている地域が存在していることがわかりました。

遺 構 調査の結果、遺構面の多くはすでに現代の建物基礎などによってこわされていたのですが、弥生時代後期と平安時代中期の溝各1、古墳時代後期と平安時代中期の土塙、ピットが多数みつかりました。遺構は部分的にしか明らかにできませんでしたが、弥生時代後期の溝は幅3m、深さ0.7mの小河川と考えられ、また平安時代中期の溝は幅4.5m、深さ0.5～0.8mのものでした。

出土遺物 土塙、ピットから古墳時代と平安時代の須恵器、土師器、古墳時代後期の製塙土器が出土しました。また、平安時代の溝からは須恵器、土師器、黒色土器、綠釉陶器、灰釉陶器が多数出土しました。これらの溝から出土した土器の中に墨で「東福」と書かれたものが数点あり注目されます。

まとめ 市街地での調査例は非常に少なく遺跡の存在すらつかめない状況でしたが、最近になり地下鉄工事などで幾つか知られるようになり、市街地の地下にも遺跡が残されていることがわかってきました。この神楽町遺跡からは、平安時代の施釉陶器や墨書き土器が出土しているので、この周辺に官衙（古代の地方役所）・寺院などの遺跡が存在する可能性が十分考えられます。



墨書き土器片「東福」



須恵器 壺・高壺（古墳時代）



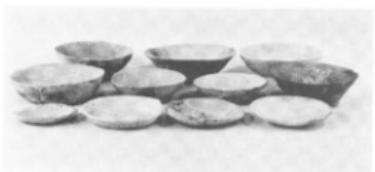
石製紡錘車（古墳時代）



綠釉陶器 壺・皿（平安時代）  
溝出土



耳皿（左 緑釉陶器，右 灰釉陶器）  
溝出土



土師器 壺・皿・壺  
(平安時代) 溝出土



黒色土器 壺（平安時代）溝出土



須恵器 壺・壺・片口鉢（平安時代）溝出土

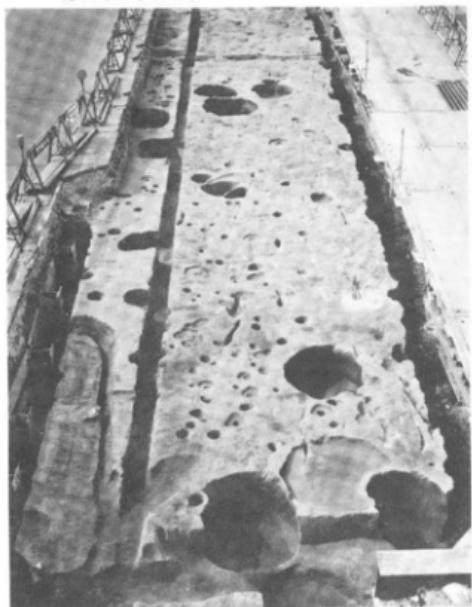
くすき あらた  
**楠・荒田町遺跡** (昭和53年度)

所 在 地 神戸市生田区楠町、兵庫区荒田町  
時 代 弥生時代～鎌倉時代  
種 類 貯蔵穴、墓址、住居址

位 置 楠・荒田町遺跡は神楽町遺跡と同様、地下鉄工事の際に発見された遺跡で、標高10～16mの台地上にあり、弥生時代前期から鎌倉時代にいたるまでの遺構・遺物が見つかりました。稻作りが始まった弥生時代前期の遺跡は神戸市内でも数が少なく、今回の発見は貴重といえます。楠・荒田町遺跡は、旧湊川沿いに中期に発展する数多い遺跡の母村になったと思われます。

遺構・遺物 発掘調査の結果、弥生時代前期末から中期初頭の貯蔵穴群が30基見つかりました。この貯蔵穴から、コメ・イチイガシや、ハモ・サバ・ブリ・スズキ・タイ・ウシなどの骨が出土し、当時の人々の食生活をうかがい知ることができます。これらは、貯蔵穴が廃棄された後にゴミ溜めとして使われた時に捨てられたものらしく、多量の土器とともに出土しました。

弥生時代貯蔵穴群



貯蔵穴のほかに、墓址・住居址・溝なども見つかりました。墓址は、土塚に長さ1.6m、幅0.4mの木棺を納めたもので、なかには人骨の一部が残っていました。

まとめ

出土した土器をみると、当地域が播磨地方の影響を強く受けていることがわかります。また、河内・和泉・紀伊の各地方からもち運ばれてきた土器もあります。

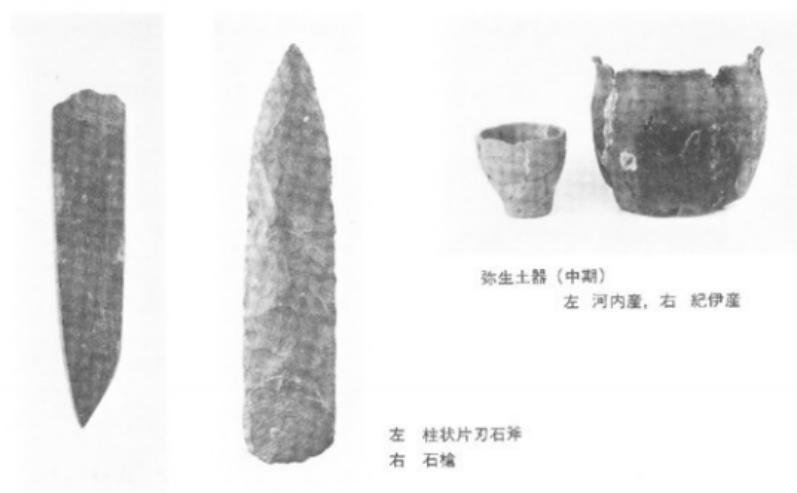
土器の多様さに加えて、石鎌・石錘・石槍・石庖丁などの各種の石器も出土しています。その他、銅鐸の鋳型の破片も発見されており、近畿地方にあまり例のない貯蔵穴群とともに、楠・荒田町遺跡をより興味深いものにしています。



弥生土器（前期）  
貯藏穴出土



弥生土器（中期）  
貯藏穴・溝出土



弥生土器（中期）  
左 河内産，右 紀伊産

左 柱状片刃石斧  
右 石榠

## 桜ヶ丘遺跡B地点 (昭和53年度)

所 在 地 神戸市灘区桜ヶ丘  
 時 代 弥生時代中期  
 種 類 住居址, 墓址

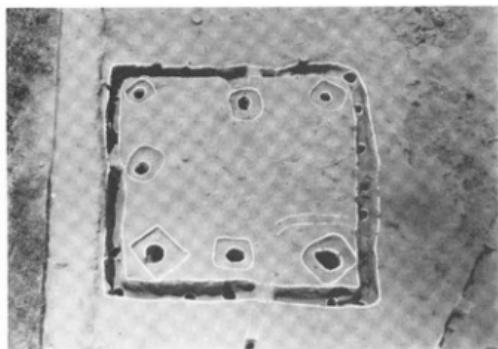
位 置 表六甲南麓の丘陵上に存在する桜ヶ丘遺跡B地点は、昭和39年12月に銅鐸14・銅戈7を出土した桜ヶ丘遺跡A地点から南へ500mの地点にあります。

B地点は、A地点発見の数年後には、弥生土器の散布地として知られるようになり、銅鐸を所有、管理していた村跡ではないかと注目されてきました。ところが、マンション建設のため、B地点が破壊されることになったので、発掘調査を実施しました。

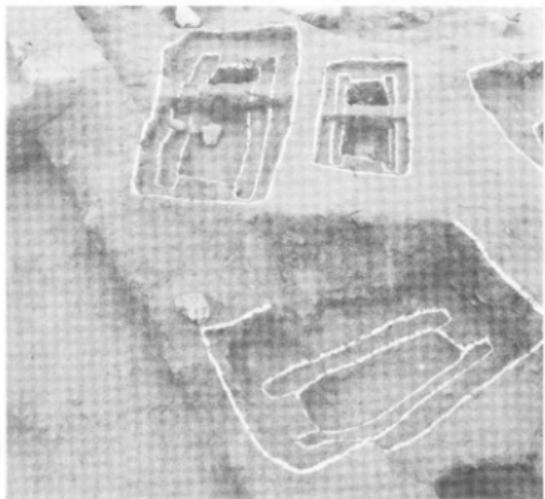
遺 構 調査の結果、遺構は住居址24(円形3・方形21)・埋葬施設35(壺棺墓2・木棺墓33)・溝2・斜面に石が置かれた遺構3カ所を発見しました。

遺 物 遺物は、石器・土器・鉄器が出土しています。石器は石鎌40・石錐1・砥石2・石錐1・石斧2・環状石斧片1がありました。土器は、弥生時代の壺・甕・高杯・器台の破片が多数出土しており、須恵器も数点見つかっていますが、完全な形のものはほとんどありません。鉄器は数点ですが、どのような形のものかは不明です。

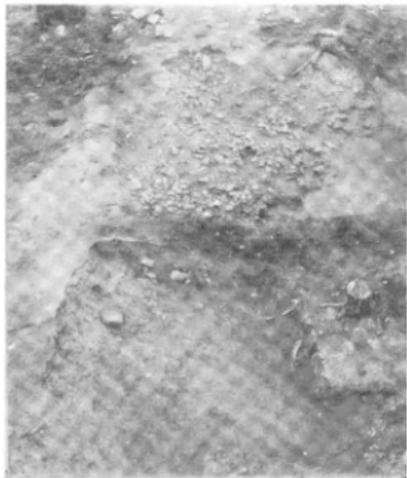
まとめ 今回の調査では、桜ヶ丘遺跡B地点と、銅鐸との関連を知ることはできませんでした。しかし、このたび確認された住居址が、今までに例のない構造のものであること、斜面に置石を施して土木工事をした遺構が発見されたことなど、新しい事実を私たちに教えてくれた遺跡でした。



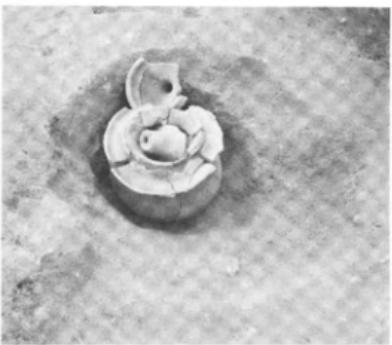
弥生時代住居址



木棺墓



斜面に貼石をした造構



臺棺出土状況

おとめつか  
**史跡処女塚古墳** (昭和54年度)

所 在 地 神戸市東灘区御影塚町  
時 代 古墳時代  
種 類 古墳

はじめに 処女塚古墳は、石屋川右岸の海岸線に近いところにあります。大正11年に国の史跡に指定され、町なかの古墳公園として親しまれてきましたが、墳丘の流失が著しくなってきたため、昭和54年から3年計画で整備することになりました。そのため整備工事に先立ち、発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果



臺形土器

調査の結果は予想以上に崩壊がはげしく、復元図作成のための十分な資料は得られませんでした。今回の調査では、前方部東側斜面の途中に、石の葺かれている部分が発見されました。さらに東側くびれ部では、墳丘の裾に、石が弧状に葺かれた部分が見つかっています。これらのことから前方部は二段の斜面に造られていたこと、斜面には石が葺きあげられていたことがわかります。後円部では、葺かれた石は発見されませんでした。また今回の調査では、埴輪は確認されていません。

整備に伴う調査であったため、内部主体の調査は行っていませんが、このたびの墳丘調査によって、処女塚古墳の墳丘は、すべて土盛で造られていることがわかりました。盛土中には、弥生時代の土器片が含まれており、この周辺に弥生時代の遺跡が存在していたと考えられます。

今回得られた資料から墳丘の規模を推定復元すると、全長66m、後円部径42m、前方部幅36mとなります。年代については、出土遺物が発見されなかったため不明です。



全 景 東 か ら



上段葺石出土状況

ぐん け おおくら  
**郡家大藏遺跡**（昭和53・54年度）

所 在 地 神戸市東灘区御影町郡家字大藏  
時 代 弥生時代中・後期、奈良時代  
種 類 掘立柱建物跡、溝

位 置　　宅地造成工事に先だって発掘調査を行った郡家大藏遺跡は、六甲山系の南にひろがる扇状地に位置しています。調査地域付近は、明治以来急速に住宅地化されたところですが、今まで遺跡は発見されていませんでした。しかし、郡家という地名に注目し、奈良時代の郡衙が存在したところであろうと、早くから推定されていました。

遺 構　　発掘調査では、掘立柱建物跡数棟・柱穴多数・土塁・溝などが見つかりました。建物跡のうち最も大きなものは、3間×4間で、西側に庇をつけた構造でした。

遺 物　　出土遺物としては、奈良時代の整地層から、6世紀後半にはじまり8世紀におよぶ土師器・須恵器のほか、綠釉陶器片・金環なども出土しています。また、さらに下層からは、弥生時代中期および後期の土器が出土しました。

まとめ　　今回の調査で明らかになった掘立柱建物は、柱の掘形が、1辺1mもある大型の建物跡であり、「菟原郡衙」の所在地であることがある程度実証できるものであろうと考えられます。今後の調査によって明確になることが期待される地域です。



弥生土器



土師器



掘立柱建物跡

はこぎけ  
重要文化財 箱木家住宅（箱木千年家）（昭和52年度）

所 在 地 神戸市北区山田町衝原  
時 代 鎌倉時代～現代  
種 類 民家址

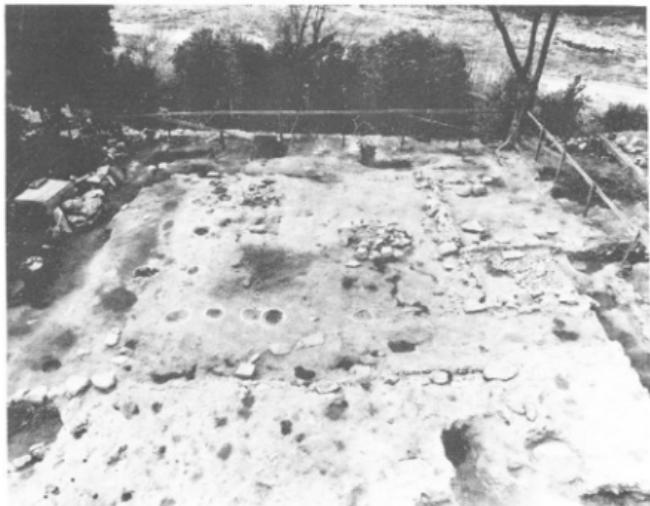
位 置 日本最古の民家といわれ、国の重要文化財となっている箱木千年家は、北と南を急な山で区切られた狭い谷間にあり。すぐ北側には山田川が蛇行しながら流れています。この箱木千年家は、ダム建設によって湖底に沈むことになったため、移築されました。解体移築した時に、現在1棟である建物が、もとは、母屋と離れの2棟に分かれていたことがわかりました。さらに、移築された跡地を発掘調査した結果、それを裏付けるような礎石の跡や、雨落ちの礫敷遺構などが見つかりました。離れは、現在の地盤の下に、古い建物の壁の跡や、いろりの跡などが見つかり、何度も建てかえられたようです。いろり跡の周辺からは、中国の銭や陶器が出土しています。

遺 構 母屋の床下からは、離れのような建てかえの跡は見つかりませんでした。母屋の床下には、長年のチリが積もっていましたが、その下の地盤には、ピットがいくつかあり、その中の1つからは、墨書きのある須恵器が出土しました。

まとめ 箱木千年家が建てられた時期は、出土した遺物からみると、母屋は鎌倉時代後半、離れは室町時代頃と考えられます。母屋部分については、まさに日本最古の民家といえるでしょう。



建物移築後の状態



離れの下層の遺物址



須恵器皿出土状況



墨書き器

淡 河 城 址 (昭和51年度)

所 在 地 神戸市北区淡河町淡河  
時 代 弥生時代、室町時代  
種 類 城址

位 置 淡河城址は、丹生、帝釈山系の北麓の台地北端に存在しており、東西約250m、南北約350mの範囲が城域で、北東隅の堀でかこまれた約250m<sup>2</sup>の地域が本丸跡と推定されています。ところが淡河城址を含む地域で圃場整備事業が行われることになったため、工事に先だって発掘調査を実施しました。

城 址 調査の結果、本丸跡を問む二重の堀跡や、台地の北西隅で櫓と思われる建物跡がみつかったことにより、城域の北限は台地の北はしあることがわかりました。しかし南限については、本丸の南100mの所で長径約3mの卵形をした水溜め跡等が確認されただけで、南限を示す遺構は検出されませんでした。

弥生時代住居址 城の南限を確認するトレンチの下層より焼土が見つかったので調査範囲を拡張したところ、南北6.5m、東西6mのやや不整形な隅円方形住居址を検出しました。出土遺物は非常に少ないのですが、床面に残されていた土器片から弥生時代おわりごろの住居址と考えられます。

この地域から弥生時代の遺跡が発見されたのは初めてで、この地域は、弥生時代の終わりごろには、稻作が行われていたことがわかります。



上 弥生時代住居址  
左 淡河城址遠景

はぎ  
萩 原 遺 跡 (昭和54年度)

所 在 地 神戸市北区淡河町萩原  
時 代 鎌倉時代  
種 類 掘立柱建物跡

位 置 園場整備事業に先立ち、発掘調査を行った萩原遺跡は、丹上・帝  
釈山系北麓の、舌状に張り出した台地上にあります。この台地の西  
には淡河の盆地が広がり、すぐ下を淡河川が流れています。淡河川  
に沿った道は、古くから裏西国街道として利用され、萩原の地域は  
早くから開けていたと考えられます。

遺 構 発掘調査の結果、掘立柱建物跡3（1間×3間が2棟、2間×3  
間が1棟）や、溝・柱穴などが見つかりました。

遺 物 遺物は、須恵器の塊・片口鉢・壺・甕や土師器の皿などとともに、  
中国からもたらされた青磁の破片も出土しています。

掘立柱建物は、その柱穴から出土した塊によって、鎌倉時代前半  
頃のものとわかりました。

まとめ 当時としては貴重品であった青磁が出土していることや、交通路  
をま近にひかえた、盆地を一望できるような場所に建物があること  
から、この建物に住んでいた人々は、当時の豪族であったと思われ  
ます。

先の淡河城址の発掘調査や、この萩原遺跡の発掘調査によって、  
地下に埋もれていた淡河の歴史が徐々に明らかになってきています。



掘立柱建物跡



須恵器塊

## よし 吉 尾 遺 跡 (昭和54年度)

所 在 地 神戸市北区八多町吉尾  
時 代 平安時代  
種 類 掘立柱建物跡, 井戸跡

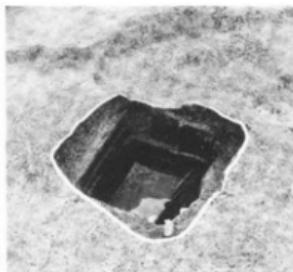
位 置 吉尾遺跡は、小高い丘陵に囲まれた小盆地に位置しています。標高約 200 mで、盆地内には武庫川の支流にあたる八多川が流れています。この地に道路が建設されることになり、工事に先立ち発掘調査を行いました。

遺 構 八多川沿いは氾濫原で、遺構は確認されませんでしたが、西側の一段高くなった地点から掘立柱建物跡 2, 井戸跡 1 を検出しています。建物跡は 4 間 × 3 間の倉庫跡と、南面に庇をもつ 3 間 × 2 間の住居用建物跡が重複していました。

遺 物 倉庫跡の柱穴 2 カ所から須恵器の塊が出土し、これらの遺物から吉尾遺跡の時期は平安時代終り頃と考えられます。さらに少し離れた地点からは、舶載青磁の皿が出土していますが、それに伴う明確な遺構は見つかっていません。

吉尾焼 この吉尾遺跡の南 1 km のところで、吉尾焼の窯跡が発見されました。窯は 2 室から成り、幅 3.5 m・長さ 10 m の比較的大きなもので、窯口は両側から弧を描いたように、中央をすばめています。焼成室の入口は、2 室とも左側に設けられていますが、天井部は近年の開墾により、かなり削平されています。

吉尾焼は、江戸時代の終り頃から明治時代の初め頃にかけて、茶器・酒器・雑器などを焼いていたようですが、現在では記録も残っていません。



上 井戸址  
左 掘立柱建物跡



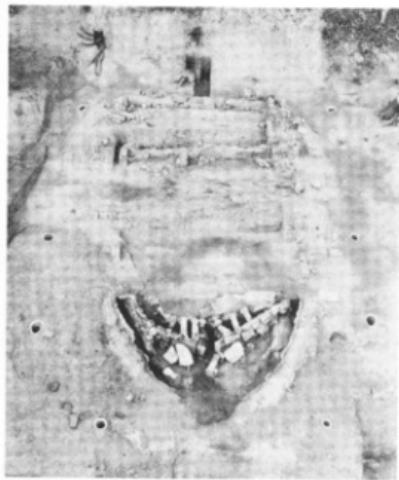
吉尾遺跡出土  
須惠器（壺・小皿）



吉尾遺跡出土青磁皿



吉尾燒



吉尾燒窯址全景



窯址出土窯道具類

ほくしん

## 北神ニュータウン建設予定地内の遺跡(昭和54年度～調査継続中)

所	在	地	神戸市北区道場町、長尾町、八多町
時	代		弥生時代、古墳時代
種		類	住居址、古墳

位 置 北神ニュータウンは、北区道場町、長尾町、八多町にまたがる丘陵一帯に建設されるニュータウンですが、ニュータウンの建設に先だって現在調査を行っています。

今までのところ建設予定地内には、弥生時代から中世にかけての遺跡が約35ヵ所みつかっています。そのうちの3ヵ所は古墳時代後期の横穴式石室が露出しており、戦前に発掘されて遺物が出土しています。

これまでに、横穴式石室をもつ古墳時代後期の古墳1、竪穴式石室をもつ後期古墳1、弥生時代後期の壺棺墓3の調査が行われています。

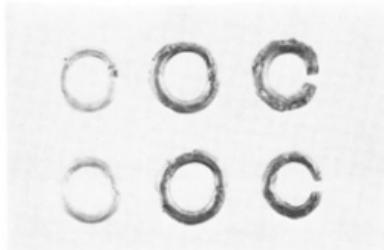
今後発掘調査が進むと、多くの遺跡が明らかになり、この地方の古代史が解明されていくことと期待されます。



右 横穴式石室

下左 須恵器(古墳時代)

下右 金環



## 自彊遺跡（昭和54年度）

所 在 地 神戸市北区道場町塩田  
時 代 奈良時代  
種 類 建物跡、土塙、柱穴、石組遺構

位 置 園場整備事業に先立ち発掘調査を行った自彊遺跡は、有馬川が北から東へと大きく流れを変えて武庫川に注ぐ合流点に近く、神戸市と三田市を画する丘陵の裾の沖積地に存在しています。

遺 構 遺跡は、水田下0.5~0.6mのところに埋もれていました。そこには、奈良時代の土器片を含む土が広範囲に存在し、数多くの土師器片や須恵器片が出土しました。確認された遺構は、掘立柱建物2(1間×2間、2間×2間)、土塙4、柱穴30、石組遺構1などです。中でも、石組遺構は、東西約5m、南北約3.5m、深さ0.4mで、池を想像させるような遺構です。

遺 物 出土した土器は、日常生活に用いたものばかりです。土師器は、环、蓋、高环、把手付鍋、把手付甕、蓋、甕などの器種があり、須恵器は、环、高台付环、蓋、罐、長頸甕、鉢、壺、甕などの器種があります。出土した土師器と須恵器の比率はほぼ同じで、土師器は煮たきに使用した鍋や甕が多く、須恵器は、供膳に用いる环や甕類、それと貯蔵用の甕が多数を占めています。

まとめ 自彌遺跡のあるあたりは、古代において摂津国有馬郡に属していました。自彌遺跡は、奈良時代頃の建物跡として当地方では数少ない遺跡の一つです。



掘立柱建物跡



須恵器環

## まとめ

以上24遺跡について、遺構・遺物の概略を述べてきましたが、このほかにも、発掘調査を行った遺跡が多くあります。その大多数が、開発工事に伴う緊急発掘調査でした。

これらの調査によって明らかになった最大の遺跡は吉田南遺跡でしょう。この遺跡は、その面積規模と継続期間の長さにおいて、他に類例を見ないほど大きな遺跡でした。

吉田南遺跡のはか、新方遺跡や西神ニュータウン周辺地域の遺跡の発見によって、明石川中流域は、地理的・歴史的にひとつのまとまった地域としてとらえることができるようになってきました。

旧市街地の遺跡は、今まで、偶然に見つかった断片的な資料しかありませんでした。しかし、近年いくつかの市街地の調査を行い、楠・荒田町遺跡や郡家大蔵遺跡などで、近畿地方でもあまり例のない弥生時代の貯蔵穴群や、菟原郡衙の所在を裏づけるような遺構が見つかってきました。

北区は、山深く、今まで遺跡はあまり見つかっていませんでしたが、近年開発工事は北区にも押し寄せ、それに伴う緊急発掘調査の件数も増えてきました。その結果、淡河町で弥生時代の遺跡が見つかるなど、予想もしなかった成果が出ています。北神ニュータウン建設予定地内の調査は今年から始まったばかりで、今後多くの遺跡が見つかるものと思われます。

このように発掘調査によって、次々と、地下にねむっていた神戸の歴史が明らかになってきています。その一方で、ねむりを覚ました神戸の歴史のほとんどは、今度は永遠のねむりについてしまいます。

今後、できるだけ多くの資料を残し、歴史を残していくよう、努力しなければいけないと思います。

\* ご協力をいただいた機関

元興寺文化財研究所

日下部財産区

神戸市吉田・片山遺跡発掘調査団

神戸市立玉津中学校

神戸市立櫛谷中学校

\* ご協力をいただいた方々

赤 穂 和 之	箱 木 勇
池 谷 洋 子	橋 本 尚 子
石 田 淳 子	花 田 勝 広
岩 城 かよ子	福 井 真由美
岸 本 万 里	福 西 啓 子
田 迂 昭 三	松 岡 規 子
中 泰 乃	松 原 千 枝
中 西 鑑	

(50音順)

\*この図録は上記の方々の協力を得て、神戸市立考古館と神戸市教育委員会文化課が作成しました。

第12回特別展  
地下にねむる神戸の歴史展  
発掘現場からの報告

昭和55年10月1日 発行

発行 神戸市立考古館  
印刷 梶原出版印刷合資会社